
猫を飼ってあれば三度だって

あびこゆうじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫を飼っていれば三度だって

【Nコード】

N0105W

【作者名】

あびこゆうじ

【あらすじ】

二度あることは三度ある。今回も大学生カズミの飼猫サクラが人間になって騒動！ 今度の舞台は大学だ！ 新キャラも増えてますカオスな猫が人間になっちゃうちよいエロ日常コメディ“猫を飼っていれば一度は”待望の第三作！

第1節 悩む男（前書き）

注意 この小説にはうんこ・しっこ的な軽い下ネタと小学生レベルのちよいエロシーンがあります。苦手な方はご遠慮ください。
続き物ですので、第一作“猫を飼っていれば一度は”からお読みいただくことをお勧めいたします。

第1節 悩む男

早くも限界に近かった。

俺は微かに痛む胃を抑えながら、足元を見下ろした。丸い毛玉が足にすり寄っている。言うまでもなく、俺の飼っている猫のサクラだ。喉をゴロゴロと鳴らしながら身体をぶつけ、なすりつけてくる。実に可愛らしいし、こっちとしても気分は良いのだが、ズボンが毛だらけになるのほどほどにしておいてもらいたいのも事実だ。

今日は珍しく一限から大学へ行く。だからだろうか、今日のサクラは妙にしつこかった。だが朝から夜まで家を空けることだってそう珍しくもないのだから、今日だけ特に寂しいというのも変な気はする。

何か関係あるとすれば明日のことだが……そのことを考えると胃が痛むのでやめておこう。ここ二ヶ月で、俺には胃痛の症状が見られるようになってきた。ストレス性だろうか。きっとそうだろう。抱えているものが大きすぎる。

「勘弁してくださいよ、サクラさん」

「ニャー」

俺の心労を知ってか知らずか、サクラは俺を見上げて一度鳴き、じっと見つめてくる。何か言いたいことでもあるようだが、よくわからなかった。

「……まあいいや。適当に寝てろよ。それじゃあな」

家を出てボタンとドアを閉め、鍵をかける。中からもう一度ニャーと鳴き声が聞こえた。行つてらっしゃい、だろうか。ああ、行つてくるとも。今日も解けるはずのない問題を解きに……。

わかりきったことだった。

俺はまた本を棚に戻し、軽く息を吐く。そう、わかりきったことだ。猫がいきなり人間になるなどという症例があるわけもない。ど

れだけ古い書籍でも、もちろん最新の専門誌にもだ。これまで俺が見つけた関わりのありそうな本といえば、せいぜい童話とライトノベルぐらいなものだ。作り話なのは言うまでもない。

このところそれなりに真面目に大学へ来ているのは、この調べ物が主な理由だ。暇を見ては図書館にこもり、色々なジャンルの本を斜め読みしている。生物学や医学関連にはじまり、古い伝承や歴史書。ついでに天文学の本もだ。今のところヒントになりそうなものはない。

俺は手近な閲覧機の椅子に座り、両手で頭を抱えた。五月末。また月に一度のサプライズパーティーがはじまる。はじまってしまう。いや、本当にはじまるのか。二度あることは三度ある。ならば、はじまるのだろう。

正直、頭の中はごちゃごちゃになりつつある。緊張と混乱、不安と恐怖。前回とおおむね同じだ。これからも毎月こんなふうにならなくちゃならないのだろうか。そう考えると、俺はビルの屋上から飛び降りたい気分になった。ああ、くそ。なんでよりにもよって俺の飼う猫が人間に変化する？　どんなファンタジーだよ、ちくしよめ。

とはいえ——まったく希望がないわけでもないじゃないか？　自分の猫とはいえ、外見は同じ年ぐらいの若いおねえちゃんと一日きやっきやうふふの桃色デイを過ごせて、まず間違いなく嬉しいハプニングがある。それも一度や二度ではないし、俺が望めばその先にだって踏みこめるのだ。そうだ、何も嫌なことばかりじゃないさ！　むしろ受け入れるんだ！　今を楽しもう！

……などと自分を鼓舞しても、気持ちが上がきはしなかった。憂鬱だ。予定日は明日に迫っている。明日、空に浮かぶお月様はまん丸になり、可愛い猫のサクラちゃんも人間へと変貌し、またとんでもない一日を過ごすハメになるのだ、きっと。

一日。一日と今言ったが、これもいくらか怪しくなってきた。一度目のときはいつサクラが人間化したのかは定かではないが、夜

中もしくは朝方に人間になり、翌日の同じころには戻っていた。だが二度目、前回のときはどうだった？

あのとき、サクラが人間化したのは大体朝の9時ぐらいだったはずだ。だが、その次の日サクラが猫に戻ったのは正午近く。つまりズレが生じている。言い換えるなら、人間でいる時間が延びている……可能性がある。この点はまだ確定したわけではない。だが、その可能性があるということは覚えておいたほうがいいだろう。

ちなみに、前回も人間と猫を行き来する現場を見ることは叶わなかった。なるときは不意に訪問してきた笠井の応対をしていて、その間になっていた。戻るときは、便所でクソをして部屋に戻ったら人間に戻っていた。なので見ていないというわけだ。

俺が思うに、サクラ自身がなったり戻ったりする瞬間を見せないようにコントロールしてるんじゃないだろうか。そこにどんな不利益があるのかはわからないが。あるいは単に絵面の問題かもしれない。とんでもなくグロかったらまずいからな。

椅子の上で背を反らし、両腕を真っ直ぐ上に伸ばしてストレッチをしてみる。ちょっと疲れた。本を読み漁ったからというよりは、徒労感のほうが大きい。もうここにおいても仕方がない。それにそろそろ二限が終わる。友人と合流して昼飯の時間だ。

俺は立ち上がり、椅子を元に戻した。なんとなく後ろを振り返ると、やや薄暗い照明の下にずらりと本棚が並べられている。ここから向こう側の壁まで何十メートルの距離があるのだろう。横の幅は？　そう考えるとこの地下書庫は相当な広さだった。そこに所狭しと本棚があるのだから、その本の総数は俺には想像もつかないぐらいの量なのだろう。

地下にあるだけあってここはいつも静かで、そしてちょっと涼しい。地下書庫にはある程度年代を経た古い書籍が置かれている。古い本の保存には気温や湿度など色々気を使う必要があるのだろう。そのわりにはこの学生であれば誰でも入れることになっている。それにどうもここは密かな勉強スポットとしてごく一部の学生に

は知られているようで、たまに階の四隅に設置されたわずかな閲覧机にいかにも優秀そうな学生が座っていることがあった。そしてそういった学生たちは例外なく机の上に大量の難解そうな書物を積んで研究なり勉強なりをしている。そんな光景を見ると、偏差値的にはどうということはない平凡でそこそこの大学だけれど、なかなか捨てたものではないと思う。

……と思ったが、本当にそうなのだろうか。俺がエレベーターのあるほうへ向かうと、机に突っ伏している女学生の姿が目映った。開かれた大判の本の真ん中に顔面を突っこみ、眠っている。傍から見ると、本を読んでいたらいきなり気絶しました、というような格好にも見える。やれやれ、嘆かわしい光景だ。やはりこんなものだろう、うちの大学は。

ため息をつきながら近づくと、それが誰なのかわかった。あろうことが、知り合い。しかも年上。俺はもう一度深くため息をついた。

第2節 先輩と友人

見てみぬふりはできなかった。

それは目の前の人物が豪快に眠っているからではなく、その下敷きになっている本がこのままではよだれまみれになる危険性があるからだ。それに思いきり押し開かれていて、このままでは古い本がますます傷んでしまう。まったく、何をやっているんだろうかこの人は。

「もしもし、大丈夫ですか？」

俺は肩を軽く叩き、小声で尋ねてみた。いたってオフィシャルな意識の確認方法だ。本来ならこれを三度繰り返し、そのたびに声と力を強くしていく。反応はなかった。面倒臭いので肩を掴んで揺すった。

「起きてください、朝ですよ」

その人は居眠りをして降車駅を乗り越してしまったことに気づいたかのように一度身体をビクリと硬直させ、いきなり起き上がった中途半端な姿勢で固まった。

「ね、寝過ぎ……あ、あれ、ここは……」

「本を枕にしないでくださいよ、新川先輩」

「えーと、眼鏡眼鏡……あ、山本くんだったの」

机の隅に置いてあった眼鏡をかけ、先輩がようやく俺を視認する。「本が折れますよ。それ、図書館のでしょう？」

「ああ、大丈夫。これ私のだから。よく眠れるんだよね、このテキスト」

本当に枕だったのかよ……。

「そうでしたか。なら邪魔をしてみませんでしたね」

「うつん、ちょうど良かったよ。もうお昼だ」

先輩は腕時計を見やり、立ち上がる。見ると、服の上に白衣を着たままだった。新川先輩は理学部で、文学部の俺とは畑違いもいい

とこだ。ちなみに理学部の学生は流行りなのか面倒臭いからなのは知らないが、大抵白衣をひっかけたまま学内を闊歩している。なのですぐにそれとわかるのだった。

「でもこんなとこに山本くんがいるなんて珍しいね?」

「そうですか?」

俺はとぼけてみた。万が一にも俺の調べていることを知られてはならない。……といっても、約一名はすでに知ってしまったわけだが。

「というか、あんまり学内で見かけることないし。トヨちゃんも嘆いてたよ? ヤマカズくんが学校に来ないーって」

「笠井に心配されるのは何とも気分が悪いですがね……。最近はそれなりに来てるんですよ、大学」

そうなんだ、と先輩が微笑む。何でも先輩と笠井は家が隣同士で子供のころからの長い付き合いだそうだ。二人の仲は姉妹同然といつていい。俺は笠井繋がりで先輩と知り合い、それなりに親しくなっていた。

「で、先輩は寝るためにここに来てるんですか?」

「あー、えーと、実験の待ち時間があつて」

「研究室とか空き教室で寝てればいいじゃないですか」

「ほら、ここは静かでよく眠れるから……」

やれやれ、この人はどういう理由で図書館を利用してるんだか。まあ今にはじまったことでもないだろうけど。新川先輩は色んなところでよく寝ている。みんなが集まるときに居眠りをしていたり、笠井と一緒に俺の家に来ていつのまにか寝ていたり。よくよく考えるとフリーダムな人だ。

「……もしかして怒ってる?」

「は? いえ、別に。先輩はいつも睡眠不足のようですね」

「毎日ついつい夜更かしをしちゃってね。だから朝がつらいし、いつも眠いしで」

それ、夜更かししなければいいんじゃない?」

「今朝もトヨちゃんが起こしに来てくれなかったら、絶対寝坊してたよ」

「あの、それはさすがにどうかと……。先輩、大学三年ですよね。小学三年じゃないですよ」

「大学です……。すみません……」

先輩が申し訳なさそうに小さくなった。一つ年上とはいえ、この人は妙に子供っぽいところがある。

「あ、でもトヨちゃんも妹ちゃんにいつも起こしてもらってるって言ってたよ。私もたまにそうなんだけどね」

「……それもどうかと思いますけどね」

というか、妹さん大変だな。姉はアホの笠井で、しかも隣家の先輩の世話も焼いて……。すごい笠井の妹。頑張れ笠井の妹。

エレベーターで一階に上がった。人の姿はまばらだ。今の時期はテストが近いわけでもない。図書館の利用者もそう多くはないのだろう。新入生たちも大学にすっかり慣れ、適度に講義をサボりはじめるころだ。キャンパス内のそこに見られた人の群れは着実に少なくなってきた。

図書館を出たところで、初老の講師が通りかかった。先輩の知っている人だったらしく、二言三言話をする。いたって専門的な話だ。俺は基本的に文系で、理系の話などわかりはしない。だが、漏れ聞く限りでは多少話がわかることもある。色々調べ物をしたからだろう。

「あ、ごめん。待たせちゃって」

「いえ……。先輩もちゃんとした学生なんですね」

「それはさすがにちよつと失礼じゃないかなー？」

ちゃんとした、というところが嬉しかったのか、先輩は怒る気配もない。穏やかで優しい人だ。先輩といると、とても落ち着いた気分になれる。笠井と一緒にいるときは正反対だ。どちらも善良な人物ではあるのに、どうしてだろう。アホかどうかの違いだろうか。いや、先輩も結構抜けているというか、ちよつとアレなところはある

けれども。

それはさておき、俺は先輩が講師と話すのを見て、先輩になら全てを話せるのではないかと不意に思った。理学部だからサクラの变化について何かわかることがあるかもしれない。少なくとも俺よりはわかるだろう。それに先輩は純真な良い人だから、俺の頭を疑ったりもしないだろう。……言うべきか、言わざるべきか。

もちろんまともに考えれば言うべきではないだろう。だが、自分で言うのも何だが俺はかなり追い詰められている。相変わらず胃は痛いし、平然を装っているが内心は明日のことから離れられない。ここで何もかもぶつちやけて、先輩の優しさに浸りたい……。そう思うのも無理はないというものだ。それに、もしかしたら笠井がすでに先輩に全て話してしまっているかもしれないじゃないか。

思い悩みながら歩いていると、いつの間にか学食の近くまで来ていた。しまった、チャンスを逃したな。それにちょうど二限が終わったらしく、人がうじゃうじゃと増えてきた。これでは内密な話は無理というものだ。公の場でファンタジーな話するのは危険すぎる。学食のまわりは、すでに人で溢れ返りはじめていた。

「いくらか人が減ってきているとはいえ、やはり学食は混みますね」「そうだね。私はトヨちゃんを待つけど、山本くんは？」

「ああ、俺も連れと一緒に——あ、あれかな」

人ごみの中であたりを見回している茶色い短髪の男がいた。向こうも気づいたらしく、手をちよつと上げながら近づいてくる。

「ういーっす、ヤマ」

「おう」

「っと、マドミさんも一緒だったの？　こんちやっす」

「おはよう、向田くん」

向田と新川先輩がラフな挨拶を交わす。先輩後輩とはいえ、気安い仲だ。もう一年以上の知り合いになるし、先輩は上下関係がどうのという人でもない。

「しっかし混むなー、昼は」

「笠井はいつ来るんです？ これじゃあ席が埋まっちゃいますよ」
「うーん、お昼前に学食の前って言うてたから、もういてもいいはずなんだけどな」

笠井のことだから、ふらふらとどこかへ行ってしまうているのか
もしれない。

「私たちはいいから、先に二人は食べてれば？」

「いやー、男と二人よりは、先輩とトヨっちゃん待ちますよー」

「そう？ でも悪いなあ」

「別に構わないだろ、ヤマ？」

「ああ、そうだな。学食が駄目なら購買で弁当でもいいし」

学食は一箇所しかないが、購買はいくつかある。何でも取り扱っているミニスーパーのような店があつて、そこでは弁当やちよつとした惣菜なんかも置いていた。パンやおにぎりは言うまでもない。学内には他に文房具や教材を扱っている本屋みたいな店もあるし、大手のコンビニも一軒入っている。最近ではファーストフード店を参入させようかという話もあるそうだ。

「それにしてもどこにいろのかな、トヨちゃんは」

先輩が手で額に庇を作り、まわりを見回す。といつても、この人だからではわかりようもない。

「俺、ちよつとそこらを見てくださいよ」

「ごめんね、山本くん」

「いえいえ」

俺が携帯を取り出しながら一歩歩み出ると、正門へ向かう道のほうからざわついた気配が伝わってきた。学生たちが立ち止まり、向こうのほうを注視している。何だろう？ 誰か有名な学生でもいるのか？ そのざわめきは急速にこちらに向かってきているようで、俺も何かと思つて立ち止まる。そして不意に俺の前の人垣が割れた。その瞬間、身体に衝撃が走った。

「ぬおうつ」

何か柔らかい物がぶつかってきた。といつか、抱きついてきた。

「なっ——」

「カズミ！」

俺は凍りついた。

「カズミ、カズミ！」

俺の首に両腕を回して密着してくる人物は——ははっ、まさかな。そうだ、こんなことあるわけない。そうさ、これは夢だ。夢なんだ。

「カズミ、おなか、すいた！ ごはん！ ごはん！」

耳元で弾けるサクラの声が、妙に遠く聞こえていた。

第3節 楽しいお昼

確かな予感を感じていた。

それは敗北の予感。あるいは破滅。もつとわかりやすく言うなら、学生生活の終焉と言ってもいい。

「ごーはーんー！」

サクラは完全に身体を密着させ、俺の耳元で昼飯をねだりながら、ぐいぐいと柔らかな二つの果実を押しつけてくる。すでに周囲からは好奇の視線と様々な囁き声が聞こえてきていた。ああ、何てこつた。

一応誤解のないように言っておくと、サクラはちゃんと服を着ている。前に俺が用意したラフな上下だ。どうやって服を見つけ出してそれを着たのかは知ったことではない。

「や、山本くん、その娘は……？」

「いやあ先輩、これには深い事情がありましてね……」

新川先輩は驚いた表情をしている。そりゃそうだ。いきなり謎のおねえちゃんが後輩に抱きついてきて、ごはんごはん言ってるんだから。

「カズミ、おまえ……いつの間にそんな可愛い片言の娘とお近づきにつ？ 羨ましいじゃねえか！」

「向田、少し黙っててくれ……」

お近づきも何もあるものか。飼猫だよ、くそつたれ。ん？ だが片言……片言か。これは使える言い訳とみた。とにかく誤解を解きつつこの場を逃げ出さねば。

「あー、つまりだな、この娘はあれだ。俺の遠い親戚なんだ。つい最近日本に来たばかりで言葉も——」

俺はこれ見よがしに大きい声で、まわりに説明するかのように喋りはじめた。

「——まだよくわかってなくてだな。それに頼れるのは俺しかないな

いという状況で――」

立ち止まってこちらを見ている学生たちも興味を削がれたのか、徐々に散りはじめた。よし、いいぞ。やるじゃないか俺！ これなら学生生活を守り通すことができるっ！

「あーっ！ サクラちゃんだーっ！」

学生生活を守り通すことができる。そんなふうに思っていた時期が俺にもありました。

「どうしたの、こんなとこに来ちゃって！ カズミちゃんに会いに来たの？」

声の主は言うまでもなく、悪意のない悪意こと笠井トヨコだ。俺の平穩を乱す者。KY日本代表。アホの体現者。

俺は笠井を殴ってでも止めるかどうか、ちよつと迷った。これ以上失言を招く前に。いやそれ以上に、テンションの上がつた笠井が大きな声で話しているので、まわりのギャラリ―たちもまた戻りはじめている。まずい、これ以上注目を集めるわけには……。

「トヨちゃん、この娘知ってるの？」

「知ってるも何も――」

くそっ、武力介入するしかねえ。

「笠井、ちよっ」

「カズミちゃんのペットだよ！」

時が、止まった。

――というわけで、この物語はバッド・エンドにて幕を下ろしたわけだ。ははっ、さすがの俺もこの終わり方は予想できなかったな。いや、笠井が悪い意味で鍵となる人物だというのは薄々わかってたんだけどな。でもまさかああ来るとは！ やられたよ。いや、完全にやられた。

さて、エンディングを迎えたところでこの先の話をしたいのだが、いいだろうか。まず手っ取り早いのは分岐前のセーブまで戻ってからはじめるということだ。この場合、どこまで戻るのかはわからない

いが……まあ細かいことはいいだろう。あとは一番最初からやり直すことだな。個人的には最初からやって、極力笠井と絡まないことをおすすめる。毒にも薬にもなる人物だが、大抵の場合は悪い方向へ向かうからな。

よし、それじゃあ次の周へ行ってみようか！ 次は頑張ろうぜ！

「目を覚ますと、16歳の誕生日の朝だった……」

「えっ、20歳じゃなく？」

「そうだ、王様のところへ行かなきゃならないんだ。世界を魔王の手から救うために……」

「先輩、ヤマが壊れました！」

「仲間は三人。戦士、僧侶、魔法使いがやはり基本だろうか……」

「精神的に強いショックを受けているのね。しばらく放っておいてあげましょう」

気がつくと、ベンチに座っていた。二号館の裏の、人気のないところだ。ここへ来るにはキャンパスをぐるりと回って来なければならず、いつ来てもほとんど人がいたことはなかった。そもそも大抵の学生はこんな場所があることすら知らないだろう。

「サクラちゃん、どのお弁当食べる？」

「ニヤッ」

「白身魚のフライ？ やっぱりお魚が好きなのかニヤー」

「トヨちゃんはサクラちゃんと仲良いんだね」

「えへへー、まあねー」

対面するように置かれたベンチの一方では、サクラを間に挟んで笠井と先輩が和気藹々と昼食を取り出していた。二人はやはり仲が良い。それにこうして見ると本当の姉妹のようだ。どちらも眼鏡をかけていて、雰囲気も何となく似ている。それが小さいころから一緒だったからなのか、一緒だったから似てしまったのかは定かではないが。

「ヤマ、生姜焼きとメンチカツどっちにする？」

「薬草」

「生姜焼きね。じゃあオレはメンチカツだ」

手前のベンチには俺と向田が並んで座っている。思えばこいつとももつ一年以上の仲になる。お互いに大学へ入ってはじめてできた友人だった。あのころの向田はまだ田舎から出てきて間もなかったから、今みたいに茶髪ではなかったし、服装ももつと大人しかった。それからいゆる大学デビューをし、今ではすっかり都会の若者だ。もつとも、基本的には田舎っぽい感じの丸顔なのだが。

「よし、それじゃあ食べよっか。あ、サクラちゃんお箸使えるかニヤ？」

「ニヤ？」

サクラは自信なさげに首を傾げた。

「やつぱりまだ無理かニヤ。じゃあわたしのスプーン使っ？」

「こっちにフォークもあるよ」

「ニヤー、ありがと」

「あ、すごい！ 今ありがとっつて言ったよ！ ねえねえカズミちゃん、聞いてた今の？」

笠井は嬉しそうにはしゃぎ、俺に聞いてきた。たしかに今は俺にも聞こえていた。驚きだ。だが、今は気分が優れない。俺は抑揚のない声で笠井に言った。

「笠井、切腹つて知ってるか？」

「えっ、な、なんでいきなり？ 食事の前にする話題じゃないよー」

「腹を切つてでも詫びなきゃならないことがあるんじゃないかな」

「えっ、えーと、もしかしてカレー食べたかった？ 交換してもいいよ？」

膝の上に乗せていた弁当のカレーを差し出してくる。俺は言葉もなく首を左右に振った。もういいや。もう何も言えねえ。

「山本くん、話はお昼の後でということ……」

「ええ、わかってますよ先輩。そこの地面にカレーをぶちまけるようなことは俺もしたくありませんからね」

「お、穏便に済ませてね……？」

ここは先輩に免じて抑えておこう。俺としても、昼飯ぐらい平和に食べたい。

「それじゃー食べよーぜ」

「ああ、そうしよう」

向田が両手を合わせていただきます、と楽しそうに言う。みんなもめいめいに手をつけはじめた。

「どう？ サクラちゃん、美味しい？」

「おいしい」

サクラは前のときよりもはるかに器用にフォークを使っていた。食べこぼすこともなく食事を進めている。時折スプーンに持ち替えているが、その動作も実にスムーズに見える。座り方も今までのように行儀の悪い感じではなくなり、ちゃんと足を閉じてベンチにちょこんと座っている。猫背もだいぶ真っ直ぐになった。

「おいヤマ、昼飯よりも愛人が気になるのか？」

「なんだよ愛人って」

「だから、ペットなんだろ？ 性的な意味で」

「そんなわけあるか。エロDVDの見すぎだろ。あれはずっと外国暮らしをしていた俺の親戚だ」

「ふーん……ま、そういうことにしますかねえ」

向田はにやりと笑って白飯をかきこんだ。まったく、こいつも一年前は純朴だったのに、すっかり都会の毒に侵されてしまった。実に嘆かわしい。まあ野郎のことなどどうでもいいが。

時折笠井に恨めしい視線を送りながら俺は昼飯を食べ進めた。サクラはやはり動物だからか、食事のペースが早い。かなりの早食いだ。その場にいる誰よりも先に弁当を食べ終え、それでもまだ満足していないらしく、ちらちらと左右に目をやっている。完全に獣の目線だ。人の食い物まで狙ってやがる。

そんな視線に気づいたのか、先輩と笠井が自分の弁当を少しわけてあげた。サクラが嬉しそうに鳴き、恵んでもらったものを食べる。元々食い意地の張った猫だったが、人間状態でもそれはそのままだ。

いやしんぼめ。

みんなが食事を終えてゴミを片した。出遅れた俺もようやく食べ終わる。相変わらず前のベンチでは女子大学生二人と人間の皮を被ったメス猫が楽しそうにはしゃいでいて、向田はそんな女性陣の様子をいくらかゆるんだ表情で眺めている。

笠井がサクラのクセっ毛を突つつき、反対側では先輩がそれを直そうと試みる。あれは何故か頑丈で、決して直らないクセだ。二人は不思議そうにサクラの頭を撫でまわした。するとおかえしとばかりにサクラは笠井の都会風おかつぱ、あるいはショートボブの出来損ないに顔を突っこみ、ふんふんと鼻を鳴らす。

笑いながら笠井が逃げると、今度は先輩のボリウム感のある三つ編みの片方に顔を寄せ、においを嗅いでからそれを口に含むようにしはじめる。三人の笑い声が響いていた。

「サクラちゃん……だっけ。なんだか面白い娘じゃねーの」

「まあ、そうだな。面白いには面白いよ」

「それに結構可愛いし。マドミさんの若奥さんの柔らかい感じもいいし、トヨっちゃんのほんわかした雰囲気も悪くないんだけど、あの娘はストレートに面白くて可愛くて、何だかこう……恋人にするには良い感じじゃん？」

「楽しそうだな、イクオくん。だが先輩は一人で朝起きられないし、笠井は残念な脳みその持ち主。サクラは野生児だ。さて、誰を選ぶね？」

「ははっ、きついなー、カズミちゃんは」

これは例え話だが、もし誰か一人を恋人として選ぶなら、明らかに新川先輩だろう。消去法で。

「それはさておき……そろそろはじめるかな」

「はじめるって、何をだよ？」

俺はその問いに答えず、ゆっくりと立ち上がった。サクラが俺を見上げ、左右の二人もつられたように顔を上げる。

「では、これより有罪確定裁判を執り行う」

「か、かくてい……？」

笠井が怯えたような声を出す。俺は少し気分が良くなった。横から先輩が半笑いで口を挟んだ。

「はじまる前から終わってる気がするけど……それはどういう裁判なの、山本くん？」

「笠井被告が犯した犯罪行為に対して有罪を言い渡す裁判です」

「……それ、裁判じゃなくね？ つーかもう終わりのところじゃん」
後ろからごもつともなツツコミが聞こえた気がするが、きつと気のせいだろう。何があるうと俺は笠井を糾弾しなければならない。

「言うまでもなく、被告は有罪である」

「審理とかないのね……」

有罪確定ですから。

「あろうことか被告は公衆の面前でサクラ氏を“ペット”などと――」

「“カズミちゃんのペット”だよ？」

「つまり男の愛玩動物であると中傷したわけです」

俺は笠井の指摘を言い換え、さらに語気を強めて続けた。

「しかし！ 真の被害者は彼女ではない！」

「マドミ先輩、今日のヤマ、テンション高すぎじゃないっすか？」

「たしかに珍しいよね。でもまああんなことがあれば」

横で二人がこそこそと話している。ええい、傍聴人は静粛に！

「最大の被害者は俺！ 俺はこれから先卒業するまでどれだけの好奇の目に晒され、後ろ指を差されながら大学生活を送らねばならないか？ 笠井くん、想像してみたまえ！」

笠井は少し考えこみ、しかし特に想像つかなかったらしく、無駄に微笑みながら首を傾げた。

「……参考までに、あるとき周囲の人たちが囁いていた言葉を一部紹介しよう。曰く、“サイテー”“変態じゃん”“さすがにヒクわー”“AVかよ”“あれって山本何とかだよ”“ぜってー近づくねー”“キモッ”“犯罪だろ”……」

段々そのときのまわりの目と囁き声がフラッシュバックしてきて、俺は高らかに笑いながら全裸で街を疾走したい気分になった。ようするに死にたいってことだ。

「そういえばずっと昔に4号館で飛び降り自殺があっただっけ」

「えっ、か、カズミちゃん？」

「先人にあやかってみるのも一興かなあ。4だけに死の4号館とか呼ばれちゃったりして」

「だ、駄目だよそんなこと！」

「笠井さん、あなたが追い詰めたんですよ！」

「うっ、それは……でも、サクラちゃんがペットなのは本当のことだし」

「いやたしかにそれはそうなんだが……あんな状況で大声で言えば誤解を招くことぐらいわかるだろうに」

だが笠井はアホだし空気読まない以前に読めないから、あれはあれで笠井としてはごく自然な発言だったのかもしれない。とはいえ、許せるものでもないが。マジでこの先どうやって大学通えばいいんだろうか。変装か？ プチ整形か？

俺が突っ立ったまま先の見えない未来に思いを馳せていると、不意に肩にポンと手が置かれた。

「なあ、ヤマ」

「なんだね向田イクオくん。名前のとおり向こうへ行っていないさい」

「今おまえはサクラちゃんがペットだと認めたわけだが……マジなのか？」

俺は自分の発言を振り返った。

「そんなこと言ったかな？」

「とぼけんなよ。先輩も聞きましたよね？」

「ええ、私もたしかに。それよりもその娘がサクラちゃんで、山本くんのペット……飼ってる猫の名前もサクラちゃん。これは偶然なのか？」

おかしいな、いつのまにか裁判官たる俺のほうが攻勢にあっ

るぞ。

「ええとそれは……実は猫の名前はこの娘が元ネタでして」

「じゃあトヨちゃんがサクラちゃんと親しいのは？」

「あー、つまり前に笠井と会ったことが」

俺はしどろもどろになりつつあった。先輩は別に問いただすような口調でもないが、答えに窮するのは事実だ。

「……ヤマカズくん、もうやめよう？」

振り返ると、笠井が珍しく真顔だった。

「何をだ？」

「嘘つくの。二人にも本当のことを言うべきだよ」

俺は笠井の顔を見つめ、そのことについて考えてみた。この二人なら信じるかもしれない。現に笠井が真実を知っているからなおさらだ。それに先輩は分野が分野だけに、良い助けを得られる可能性がある。向田は……まあ、信頼できる味方が一人でも多いに越したことはないか。色々顔も広いし、何か思いつくことがあるかもしれない。

だがしかし、本当に言ってしまったていいものだろうか。これ以上知っている人が増えれば、もしかすると話が拡散してしまうのでは？ うーむ、でも真っ先に言いふらしそうな笠井が先輩にすら黙っていたことを鑑みれば、大丈夫だろうか。向田は見かけに反して義理堅い男だし、先輩は信用できる人だ。

今ならまだ外国の親戚がどうか、あるいは本当に愛人だとかで言い通せなくもない。だが……もう限界かな。どう考えようと、俺の心はもう傾いてしまった。きっとそれは笠井がマジ顔だったからではなく、全てから解放されたいという衝動的な思いからだ。そうさ、胃に穴が空くよりはいいじゃないか。

「……わかったよ、言うよ」

「うん、偉いぞ、カズミちゃん」

笠井が伸び上がって俺の頭を撫でようとしてきた。それをするりと避ける。唇を尖らせ、笠井が不満気な唸り声を上げた。もちろん

本気ではない。

「何だか青春って感じだね」

「案外この二人、良い感じじゃないっすか？」

外野が何か小声で不穏なことを話しているが、聞かなかったことにしておこう。ふと見ると、サクラは空いたベンチの上で丸まって横になっていた。やれやれ、良い身分だ。

「まあ座ってくれ。それなりに長い話だからな」

俺は三人を見回し、話を始めた。

第4節 猫主人の告白

少なからず困惑していた。

何をどこから、どの程度話したのか。いざ話すとすると、やはり話が話なだけに、難しい。それに誰が好き好んで自分の頭がイカれていると喧伝したがる？ くそっ、まるで狂人の独白だ。

「さて……そもそも発端は、忘れもしない先の4月1日。あの馬鹿らしいエイプリルフールの日だ」

今でもありありと思い出せる、あの衝撃を。しかしどう言ったものかな。まあいい、ありのままを話すだけだ。信じるかどうかは勝手にすればいい。これが事実なのだ。

「朝、俺が目覚ますと、サクラが人間になっていた。そう、そこのおねーちゃんの正体は猫のサクラなのだ」

「は？」

「あん？」

向田が間抜けな声を上げたので、思わずこちらに変な声を返してしまった。

「いやいや、いきなりなんだよそれは？ 意味わかんねーって」

「そうだな、意味わからないな」

「ってか、それマジに言ってるのか？ 猫が人間って」

「仕方ないだろ、本当のことなんだから……」

俺がため息をつくと、向田は微妙な顔をして黙った。俺の顔に深い苦悩の色でも読み取ったのかもしれない。

「とにかく猫が人間になったんだよ。それでとにかくその……苦勞したわけだ。色々」

さて、どこまで話そう？ 全裸から服を着せました。シモの世話をしました。襲われそうになりました。一緒に風呂に入りました。ははっ、話せる部分がまるでないじゃないか！

「あの、山本くん、ちよっといいかな？」

「なんでしょうか先輩？」

「猫がどうやって人間に……？」

「さっぱりわかりません。ですが、あれはサクラです。これまでに二回もこうなりましたから、もう間違いありません。頭のアレな女が猫のフリをしているとか、そんなことはありませんよ」

「そ、そう……」

明らかに信じがたい話ではあるが、先輩はすでに真面目な顔になっていた。信じてくれたようだ。それどころか、この人はすでに人間化の謎について考えはじめてもいるようだ。さすが理系。

「ヤマ、質問が」

「どうぞ向田くん」

「なんで猫が人間の言葉喋れるんだ？　っつーか言葉わかんのか？」

「よくわからんが自然に人間の言葉は理解しているようだな。喋るほうも最初は鳴き声だったが、徐々に人間の言葉になっていった。

途中からは俺が色々単語を教えたりもしたが」

「……わけわかんねーけど、すごいじゃん。これからはオレの言うこともわかってくれるかな」

向田は何度も俺の家に来ているのでサクラとは面識があるが、サクラからはあまり相手にされていなかった。嫌いというわけではないが、別に好きな相手でもないのだろう。思い返すと、さっきからもサクラは向田に興味を払っている様子ではない。

「それで、サクラちゃんはどういうときに人間になるの？」

「それなんですけど、どうも満月の日になると人間になるようなんですよ。過去二回はそうでした。狼男みたいなものですね、はっはっは」

俺は乾いた笑いを発した。だが先輩は真顔のままだ。

「謎だらけね」

「ええ、まあ。色々調べてはいますが、何もわかりません」

腕を組んでアゴに手をやり、先輩は考え事をしはじめた。何か少しでも打開策を見つけてくれるといいのだが。はっきりに言って先輩

だけが頼りだ。

「それにしてもカズミちゃんに会いに大学までやってくるなんて、すごいねー。道とかわかったのかな？」

笠井がのほほんと言う。

「たしかにすごいかもしれないが好ましいことではないだろうよ。道は俺のにおいとか辿ったんじゃない？」

「えーっ、犬じゃないんだから」

「猫の嗅覚も犬みたいなものだろ、多分。しかし――」

俺は相変わらず昼寝しているサクラに目をやった。前回の前に買っただいた長袖のシャツにズボン。靴は玄関に置いてあった俺のスニーカーだ。サイズが全然違っただろうに、よくここまで履いて来たものではある。というか、履物という概念があったのかこいつには。

「まあ、たしかによくここまで来たもんだよな」

「それはもう、サクラちゃんはヤマカズくんが大好きだからねー」

「はいはいそうですね。……あっ」

「ん？ なあに？」

「……玄関の鍵、開けっぱなんじゃね？」

笠井が一瞬呆けたような顔になった。それから慌てはじめる。

「どどど、どうしようカズミちゃん！ 泥棒さんが大収穫祭で漁夫の利で！」

「落ちて着け笠井、意味がわからない。しかしまいったな。本当に鍵を閉めてなかったらちよつと無用心ではある」

「ちよつとどころじゃないよ！ 最近ひったくりが急増してて町の治安が悪化してるんだよ！」

「なんでそこだけまともな意見なんだよ。仮に空き巣が入ったとして、奪われて困るものはないと思うが……」

俺は自宅とその付近の状況を思い起こしてみた。アパートには別段親しくしている住人がいるわけではないし、訪ねてくる人間など大学の友人がせいぜいだ。それならどうということはない。それと

も他に誰か……。

「あつ、宗教のねーちゃんが来たらやばいな」

「誰だそりゃ？」

向田が怪訝な顔で聞いた。

「たまに怪しげな宗教勧誘のねーちゃんが来るんだよ。厄介なことに多少話をしたりもするからちよつと親しい。もしかしたら勝手に家に上がりこむかもしれない。なにせ宗教だからな」

「おまえって変なつきあいがあるんだな」

「それをおまえが言うか、向田。友達百人計画は進行中だろうが？」

「まあよ。そう言われるとオレも人のことは言えないか」

何が面白いのか、向田がはっはっはと笑った。田舎から出てきたこの男の大学四年間の目標は、“友達百人できるかな”だ。将来を見据えて言っているのかはわからないが、実現できればいずれは役立つことなのかもしれない。

「ところで山本くん？」

「なんででしょうか先輩」

「どうして今日いきなりサクラちゃんは人間になってあなたに会いに来たのかしら？ 何か特別な日とか？」

「あー……それはですね、今日というか、予想では本来明日なのですが、サクラが人間になる日なんですよ」

「というと、明日が満月ってことかな？」

「ええ、そうです。天文とか扱ってるウェブサイトやら新聞で調べてますから。なのに今日なっちまったというのは……」

俺はちよつと考えこんだ。満月は明日。変化するのは明日のはずだ。だが前日の今日にサクラは人間化した。俺の念頭にあるのは、サクラの人間化への順応、それと戻る時間の順延。ならば前倒しもあり……か？

「サクラの何と言うか……人間になる力、みたいなものはどんどん強くなっているのかもしれませんが。だから前日から人間になったし、前になったときは丸一日経っても戻らなかった……」

「……その方向で行くと、サクラちゃんはいずれ猫から人間になつてしまつと……？」

「そこまではわかりません。そうなるにしてもずっと先でしょう。多分その前に寿命が来ますよ。あるいは別の何かがあるのかもしれない」

先輩が一つ頷き、また腕を組んだ。今俺は何の気もなしに意味深なことを最後に言ったが、それはどういうことなのだろう。ほとんど無意識の発言だった。何故あんなことを言った？ それとも俺は何かを見落としているのか？

「それで実際、どうするんだ？」

藪から棒に向田が言った。

「どうつて？」

「だから、人間になつてるときはこうして家の外に出てきちゃうこともあるんだろう。まさか押入れに閉じ込めて目張りしておくつか？」

「ふうむ、なるほど。今までは俺が家にいればそれで良かったが、この先は予想どおりというわけにはいかないからな。さしあたりさつきの設定を流用するしかないか」

「外国暮らしだった親戚か？」

「ああ。実際に語彙も少ないし、片言だ。通らない話ではないだろう」

「それで、どうやって親戚だと証明する？ 今日とはまたま学内に入りこめたようだが、もちろん学生証なんて持つてないわけだろ？」

「そこが頭の痛いところだ。職務質問をされたら人生が終わると何度思ったことか。だが身分というものはその簡単に作れるもんじゃない。戸籍を捏造するのは犯罪だろうし」

「たしかにそれは犯罪だ。けど、案外簡単に作れるらしいぜ？」

向田はにやり、と怪しげな笑みを浮かべた。

「どうということだ？」

「実はオレの叔父さんが私立探偵をやっているんだが」

これはまたとんでもなくレアな職業が出てきたぞ。一般人はあまりお世話になることのない仕事だ。

「その関係で色々裏世界の事情に詳しくてな。それで話をよく聞くわけだ」

「そうなのか？」

「ああ。というか、言っていなかったがそこでバイトしてるんだ、オレ」

「おいおい、初耳だぞそりゃ。そんな面白そうなことどうして言わなかったんだよ？」

「それはまあ、人に憚られるようなこともするからなあ」

「例えば？」

「……尾行とか？」

ほんの一瞬間が空いたところを見ると、他にも言えないようなことを色々やっているようだ。おそらく一番適法な仕事を言ったのだろう。

「へえー、イクオくんは探偵さんだったんだあ。謎は全て解けたね！」

「探偵のバイトだけだね。……謎？」

まともに笠井の相手をするのは徒労だぞ、向田よ。

「見た目はどこにでもいる若者だし、女の人の後ろを歩いていても自然と言えば自然ね」

「せ、先輩……そんなチャラ男みたいな言い方しないでくださいよ。つてか、なんで女の人の後ろ限定？」

「やっぱり不倫相手の調査とかが多そうなイメージかなと」

たしかにそれはとても現実的だ。しかし探偵といってもきつと俺なんかには想像もつかないような仕事がたくさんあるに違いない。

「それで向田、戸籍がなんだつて？」

「ああそうそう。戸籍ってのは結構簡単に買えるらしいつてさ」

「犯罪かね」

「多分な。でもわりと安全っつーか、書類出して通っちゃえばそれ

でいいみたいです。名前とか本籍変えないんなら買ってそのままでもいいし」

「ふーむ。で、値段は？」

「そこまではちよつと。今度聞いておくよ」

「ああ、頼む。だがあくまでさりげなくな」

「おうよ」

もしもこれで上手くいくなら、身分という問題は解決するのもかもしれない。そうなれば問題が一つ解決する。だが、逆に罪の意識に怯えることになるかもしれないが。

「山本くん」

「はい？」

「私、もしかしたら心当たりがあるかもしれない」

「戸籍を買うことについてですか？」

「ううん、猫が人間になることに関して」

「本当ですか？」

唐突すぎる先輩の言葉に俺は思わず聞き返した。

「うん、ちよつとね。でもこれは確かなこととは言えないから、少し調べてみることにするね」

「そうですね、よくわかりませんがお願いします。でもこんな現象に心当たりって」

「……私のゼミの助教授がいきなり辞めちゃった話、知ってる？」

「そういえばそんな話をどこかで小耳に挟んだ気がする。先輩からではなく、ただの噂話で。」

「ええ、理学部の何とかという先生が何の前触れもなく退職して、すぐに連絡が取れなくなったとか何とか」

「そう、それ。おかげでゼミは違う先生が担当することになったやつだし、学生の研究データとかも持ってっちゃたりで大迷惑」

「それはとんでもない話ですね。で、その先生が何か？」

「ちよつと前に研究室のデータを一度全部バックアップ取るうって話になってね。それを私がやったんだけど、その先生のファイルに

ちょっと気になるものがあつたのを思い出したの」

……それはその助教授のデータを勝手に見たってことだろうか。それはそれでいいのかな？ まあいいか、それぐらい。先輩のことだから悪気はないだろう。

「それがもしかしたら何か関係ありそうかなって思つて」

「なるほど、わかりました。でも気をつけてくださいね、先輩」

「大丈夫だよ、もう助教授いないから」

ふふつと新川先輩が微笑む。また一つ光明が見えてきたようで、俺も思わず笑つた。

「うんうん」

「な、なんだ笠井？」

「ほらね！」

「……何？」

「みんなに言つて良かったでしょ？」

ふふん、とドヤ顔で笠井が満面の笑みを浮かべた。悔しいが、今回だけは笠井の言うとおりだったかもしれないな。

「ああ、そうだな。たまには笠井の意見に耳を傾けて良かったよ」

「むーっ、それだとカズミちゃんの耳が良かったみたいにならない？」

無駄なところで細かいやつだ。だがこれは笠井の功績でもあるしな。

「本当に感謝してるよ。ありがとう、トヨコ」

「えっ、あれっ。……どどど、どんなもんじゃいつ！」

どういたしまして、と言いたかったのだろうか。慌てた笠井の顔が真っ赤になっていた。

「つつーか、ヤマつて結構たらしつすよね」

「だいぶ言い慣れてる感じしたね、今の台詞は。しかも呼び捨て」
ええい、外野がうるさいな。冗談に決まってるだろ、常識的に考えて。

「じゃ、じゃあ、わたしはサクラちゃんの家家庭教師しよっかな……」

「ああ、それは良いな。仮にもそのバイトしてるわけだし」

「そ、そうだね。でも何をすればいいかな？」

「妹さんが子供のとき何してた？ そう考えりゃ良いんじゃないかな？」

「あー、なるほど。じゃあとりあえず……ひらがな？ あとは……お着替えはできるし、漢字はまだ早いし……」

笠井が呟きながらあれこれと幼児教育について考えはじめた。もうすでに笠井は多くのことをサクラに教えてくれたと思うが、この先も笠井に任せればより一層人間らしくなっていくかもしれない。そうなればもちろん俺は助かる。

「つつーか、トヨっちゃんも天然だけど結構積極的っていうか」

「家庭教師するってことは、山本くんちに行く大義名分ができたってことだよな」

ええい、また外野が何か言ってるぞ！ どれだけ勘ぐれば気がすむんだ？

「ま、わけわかんねー状況だけど、これでなんか道筋みたいなの見えてきたんじゃないの？」

「そうだな、みんなそれぞれに協力してくれたし。……しかしそうになると俺は」

「うひゃあつ！」

いきなり笠井が奇声を上げた。見るといつの間にか起きだしていたサクラが後ろから抱きついていてる。

「何してんだサクラは……」

「お、女の子同士のスキンシップってやつですかーっ！ テンション上がってきたーっ！」

「いや、向田、それは上げすぎだろ」

「上げてこうぜ、ヤマ！ だってよお」

向田がちよっと視線を下げる。俺も下げた。サクラの手が笠井の服の裾から侵入していた。

「……へそチラじゃね？」

「そんなチラリズム、笠井じゃ価値があるまい」

「でも段々と際どくなってきましたぜ旦那……！」

サクラの手は着実に服の中を遡上していて、上着が徐々にずり上がっていつていた。なるほど、たしかに際どい。

「つて、見ない見ないっ」

先輩が俺たちと笠井の間に入ってガードした。そりゃそうだ。

「おお、まさかの視聴制限！ この先はクレジットカードからお支払いを！」

「別に見るほどじゃないだろ」

「おいヤマ、誰にも言わねーから本当のこと言えよ。どう思った？」

「ちよつと興奮した」

俺と向田はお互いを肘で突きあつた。男と男の友情、その構成成分はときにエロが大部分を占める。

「やーめーてー！」

「もう、サクラちゃん！ 離れなさいー」

目の前ではまだサクラが笠井を襲っていた。一体何がしたいのだろうか。多分深い意味はないのだろうな。

「おいやめろ、サクラ。いい加減にしろ」

俺が言つと、サクラの動きがぴたりと止まった。笠井の肩越し、先輩の向こうから俺の目を束の間じつと見つめる。そして笠井から離れ、元のベンチに座った。

「た、助かったあー」

笠井が息を吐き、衣服を直す。俺の隣で向田が残念そうな表情をした気がするが、気のせいかもしれない。

「すまないな笠井。サクラなりに意味があるのかもしれないが」

「うーん、よくわからないけど鼻がふごふごいつてたよ」

良い匂いでもしたのだろうか。

「でもすごいねカズミちゃんは。マドミちゃんが言っても駄目だったのに」

「そうそう、山本くんは一声だけですぐに」

「やっぱりカズミちゃんは飼い主だもんね。あ、今は飼い主っていうと変な感じだけど」

「……そうだな」

「そうだ、俺はサクラの飼い主だ。みんなはみんなでできること、やってくれることはある。だが、サクラを監督し、制御するのは俺の役目だ。俺にしかできない。いや、俺以外の誰にもやらせはしない。」

「サクラ、あまりおかしな真似はするなよ」

「ウニヤ」

「……本当にわかってるのか？」

「わかった、ごしゅじん、さま」

「はは、ご主人様って。そんな単語誰が教え——」

俺は振り返りかけて、止まった。

「やっぱりそういうことかよ……！ こんな可愛い女の子と一緒に暮らして何も無いわけがないもんなあ！」

「山本くんって見かけによらずマニアックっていうか、ちょっと普通じゃないところあるよね」

「カズミちゃんはそういうこと何もないって言ってたけど、全部嘘だったんだね。どんなことまで教えたのかな」

向田は拳を握り締め、悔しがっている。その横の女性二人はじつとりとした目で俺を見ていた。その目には明らかな侮蔑の光が宿っている。

「いや、その、そんなわけないじゃないですか」

「……ごしゅじん、さまの、えっち」

サクラが追い討ちをかけた。場が完全に冷え切る。何もかもを失ったような気分で、俺はサクラを力無く見た。

「……仕返しにしても、これはひどくないですか、サクラさん？」

「ニヤ——」

サクラはまさに猫を被ったまま、小首を傾げて笑った。

第5節 帰路にて

気のせいに違いなかった。

まわりの学生たちから向けられる好奇の目。囁かれる不穏な言葉。そういったものが少なからず感じられたが、きっと気のせいだろう。あるいはこれが被害妄想というやつなのかもしれない。今の俺の精神状態は健全とはいえないからな。

みんなと別れ、サクラと二人で足早に学内を出た。もちろん守衛室の前などは通っていない。帰宅するにはやや遠回りだが安全なルートを選んだ。結局講義は午前中にひとコマ出ただけだが、もうそんなことは知ったことか。とにかく早急にサクラを家に入れなければ。

サクラは野生時代以来であろつ外界の景色をしきりに眺めながら歩いている。ときには目線を地面へ向け、空を見上げたりもする。いつもとは違う視点を楽しんでいるのだろうか。何であれ、今は先を急ぐ他に選択肢はないが。

「ニヤ？」

公園の前でサクラが立ち止まった。それほど広くもない公園だ。遊具も中央に砂場があるだけで、あとはベンチがいくつか置かれている程度だ。人もいない。

「ニヤー、ニヤー」

サクラが公園のほうを見据えながら奇妙な動作をしはじめた。両手を前に突き出し、それを左右に広げている。平泳ぎの腕の動きに似ていた。もちろん意味は不明だ。

「行くぞ、サクラ」

「カズミ、ニヤー」

もう一度同じ動きを繰り返す。何かを訴えたいらしいが、該当する言葉をまだ知らないのだろう。……まさか平泳ぎではあるまい。

「あー、えーと……何だ、何かに触りたいのか？」

サクラが首を横に振る。

「ふーむ、そうだな……ここは何か、って聞きたいのか？」

今度は首が縦に振られた。

「そうか、ここは公園だ。わかるか？ 子供たちが遊んだりする、人間の……あー、憩いの場じゃわかんねえか。つまり、休んだりみんなが集まって遊んだりするところだ。オーケー？」

「ンニヤ」

わかったらしい。そしてそのまま勝手に公園へと入っていく。やれやれ、どうしようもないやつだ。仕方なく俺も後ろをついていった。今のところ誰もいないし、少し見て回るぐらいなら構わないだろう。

「と思ったが、木に登ろうとするのはよしなさい」

「ニヤー」

おもむろに木の幹と枝に手足をかけたサクラを後ろから止める。

サクラは対して気にする様子もなく、ぐるりとその場で回って公園の真ん中を向いた。目は砂場へ向けられている。何となく嫌な予感がした。

「ニヤツフン」

不意にサクラが指先を揃えて伸ばし、手首をカクツと曲げた。わかりやすくいうと、カマキリの手の形だ。螭螂拳でもはじめつつもらしい。いや、もちろん冗談だ。猫と砂場。することは掘ってクソをするぐらいなものだろう。

「やめなさい。それとも便意を催しているのか？」

「ンーニヤ」

そういうわけではないらしい。ただ単に砂を掘りたいだけのようだ。だがそんなことをされてもそれはそれで困る。

「サクラ、とりあえず帰ろうぜ」

「こうえん」

「うん」

「あそぶ、ところ」

俺は自分の発言を後悔した。くそつ、いまましい猫め。いや、言ったのは俺か。それにしても言葉の理解がとて進んでいるようで何よりだ。逆に言うと、迂闊なことは言えないということでもあるが。

「もう少し人間らしいことにしてくれ。そうだな、まずはベンチに座ろうか」

俺と並んでサクラはベンチに腰を下ろした。座るという一動作を見てみても、だいぶ自然な動きになっているのがわかる。いつのまにか二足歩行にもすっかり慣れたようだ。強いて言うならほんのちよつと猫背なのがおかしいぐらいか。

「すわる、あそび？」

「遊びではないな。ただ座ってるっただけだ。そうだな……猫じゃらしでも生えていれば都合が良いんだが」

俺はあたりを見回したが、生えていなかった。たしか夏から秋ぐらいじゃないとあれは生えていないはずだ。仕方ないので、そのへんの適当な雑草の茎を折ってみる。そしてそれをサクラの前で左右に振った。

「ほーれ、飛べ！ 殴れ！ 存分にじゃれるがいい！」

だがしかし、サクラは無表情に俺を見るだけで何もなかった。ちくしょう、これじゃ俺が馬鹿みたいじゃないか！

「どうしたサクラ、目の前で変な物がぶらぶらしてるぞ！」

サクラはまだのってこない。俺は半ば意地になってきていた。もう一押し必要か……？

「さあ猫の本能を呼び覚ませ！ もっと熱くなれよ！」

「……カズミ」

「おう、何だサクラ。鍛え上げた必殺のカウンターパンチを見せてくれるのか！」

「みんな、みてる」

急激に自分の体温が下がっていくのを感じながらおそろおそろ後ろを振り返ると、通りがかったらしき主婦二人がこっちを見てひそ

ひそと呟きあっていた。嫌悪に顔を歪める下校帰りの女子中学生、俺を凝視するくたびれたリーマン。さらにその向こうには大学生と思われる若者たちがいて、皆一様にこちらを見つめている。俺は雑草をさつと捨てた。

「日本がもし銃社会だったら俺はこれで一度死んだな。死因は自殺」「カズミ」

「何だ？ その前に自殺相談ホットラインへ電話をするべきか？ それとも潔く死ぬべきか？」

「……ダメ、ぜったい」
猫に説得され俺は自殺を思いとどまり、不意に湧き起こったどうしようもない発作に襲われて我が家へ向けて駆け出した。

家に着いた。

「五月の終わりともなるとさすがに熱いな。ましてや全力疾走した後だとなおさら。はーっはっはっは」

「カズミ」

「何だねサクラくん」

「あし、おそい」

「……そりゃ猫よりは遅いだろうよ」

いきなり走り出した俺をサクラは後ろから軽く追い抜き、そのまま家のほうへと走っていつてしまっていた。そして俺はようやくそれに追いついたという格好だ。

「まあいい。鍵、鍵つと……あ、開いたままなんだっけ。一応ドアは閉まっているが……」

「ニヤツ」

サクラが不意に高い声を上げ、自分のズボンのポケットに手を突っこんだ。そして引き出された手には、鍵が握られていた。

「おお、鍵じゃないか。だがこれは何の鍵だ？ どこかで拾ったのか？」

「ニヤフー」

サクラはふんつと鼻から息を出し、どことなく自慢げな顔で鍵を鍵穴に入れた。回す。ガチャリ。

「かぎ、ひらいた」

「……それ、家の鍵か？ 俺が持つてるの以外だと、たしか引き出しにしまつてあるスペアだけのはずだが」

「それ、これ」

ということは、サクラが俺の引き出しからスペアキーを持ち出して、家に鍵をかけて出てきたってことか？ いやいや、まさかそこまで。そもそも、なんでそこに鍵があるとわかる？

「しかし、本物だなこれは」

俺はドアを開いてから閉めて、サクラの鍵でもう一度鍵をかけてあげた。ドアはもちろん開く。紛れもなく本物だ。自分の持つている鍵と見比べると、まったく同じものだというのがわかる。

「ふーむ、にわかには信じられないが、すごいなこれは。施錠することを覚えたとは。施錠という概念があつたのかサクラには」

笠井に教わつたわけではないから、これは俺の普段の動きを見て覚えたということだろう。まったく見ていないようで、実は結構見られていたのかもしれない。ふと見ると、サクラはさっきの表情のまま俺を見上げていた。いかにも褒めてほしそうな顔だ。

「わかつた、わかつたよサクラ。だがその前に部屋に入ろう」

こくりと頷き、サクラが家へ入る。ちゃんと靴を脱いで上がった。俺はしっかりと鍵をかけ、確認した。振り返ると、キッチンの前でサクラがじつと俺を見ていた。そばに寄つて、その頭に手を置いた。「偉いぞ、サクラ。よく気がついたな。おかげで助かつた」

俺に頭を撫でられながら褒められ、サクラは嬉しそうに笑った。どことなくこちないその表情は、ちょっと人間らしくはないが、それだけに普段の猫のサクラみたいだった。

「おまえは実に良い猫だな。ほーれほれ」

いつもしているみたいに喉の下を撫で上げてみる。サクラは少し陶醉したような顔になって、猫特有のごろごろ音を出しはじめた。

どこから出しているのかはさっぱりわからないが、気持ちが良いのだろう。

「ニャー……」

サクラがふらりと半歩踏み出し、二歩目で俺の胸にもたれかかった。首筋のあたりに顔を押しつけ、手を身体に回してくる。平たくいうと抱きついてきたということだ。

「……これはあれだ、人間と猫の純然たる交流だからな。そのところ、勘違いしないでよね」

誰にともなく呟き、俺はサクラの身体を抱き締めた。いつもの猫のにおいと、女の子のにおい。その二つが入り混じった今のサクラ特有のにおいを嗅ぎながら、俺はサクラが満足するまで頭を撫で続けた。

すっかり気を良くしたサクラは、また猫に戻るまで俺にべったりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0105w/>

猫を飼っていれば三度だって

2011年8月24日03時19分発行